

2020年(令和2年) 1月30日 木曜日 (8)

中経 論壇

経営支援NPOクラブ理事
吉田 仁



差が広がっている。

昨年末、内田洋行のCSR活動としての「屋台大学」で、

田辺市熊野ツーリズムビュー

ロー会長の多田稔子さんの話

を聞く機会を得たが、そこで

地域が目指すべき観光振興の

姿を見た。多田さんは、世界

遺産に指定された熊野古道を

中心に、地域の活性化を目指

し、外国人旅行者受け入れに

成功しているのだ。

世界遺産に指定されたチャ

ンスを活かしたいという思い

から、2006年に多田さん

は行動を開始した。活動の基

本理念は、地域の人々と旅行

海外につながる熊野古道

者のコミュニケーションを重視したSUI PORTとRESP ECTであり、地域の資源の乱開発を避け、保全・保存を目標とした。そして、誘客のターゲットを、歴史的古道を歩くことを趣味とする外国人個人旅行者に置き、外国人自線対策を進めるため、熊野を愛してやまないカナダ人を採用し、外国人受け入れについて、ワークショップを開催し住民の協力をあおぐ。ここには、地域の人々と外国人旅行者との言葉の壁を超えた触れ合いがある。

事業の進め方にも、多田さんの考え方が反映されている。対象が、外国人個人旅行者であることから、始めの3年間、熊野古道の表記の統一や案内板整備など受入れ態勢に重点を置いた。その後、本格的なプロモーションを行ったが、それだけでは誘客につながることが判明し、きめ細やかなサポートと売る仕組みの構築のため、10年前に着地型旅行業を開始した。その活動が評価され、観光庁長官賞などを受賞している。今後は、三重県からの熊野古道へのアクセスを開発し、伊勢神宮と熊野三山をつなぐ広域観光ルートの開発を目指すという。

多田さんの熱い語り、地域と人をつなぐ観光の原点を見る思いがした。いつか私も、平安時代につながる熊野詣の歴史に思いを馳せながら、熊野古道を歩き、地元の人と交流してみたいと思う。

言葉の壁を超えた触れ合い

観光立国を目指す日本は、インバウンド旅客誘致をはかっているが、京都など有名観光地では、問題も起きている。外国人観光客のために、住民の足としてのバスが混雑し日常生活に不都合が生じたり、ゴミの廃棄により生活環境が悪化するなど観光の質が問われているのだ。一方において、地方を訪れる外国人観光客は、まだまだ少ないのが現状であり、観光面での地域間格